

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00115

研究課題名（和文）被差別部落からのアメリカ移民に関するトランスナショナルな歴史経験についての研究

研究課題名（英文）A Study about Trans-National Historical Experiences on the Discriminated Minority Group BURAKU-MIN Immigrants among the Japanese Americans

研究代表者

廣岡 浄進（HIROOKA, Kiyonobu）

大阪公立大学・人権問題研究センター・准教授

研究者番号：30548350

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、被差別部落からのアメリカ移民をめぐる共同研究であった。日米の文献史料と渡航調査および先行研究の批判的検討を通じて、いくつかの事例を確認するとともに、移民の間での部落差別が戦時下の日系人強制収容を通じてアメリカ側に把握され、調査の中で注目されていたことを明らかにし、さらに強制収容を生政治として再検討する観点から戦後の日本占領政策との連関について問題提起した。また、研究成果発表の環境にかかわる課題として浮上している情報化をめぐる、部落史研究の立場からみえる課題について発信し、さらに近年の同和行政をめぐる問題の不可視化につながりかねない動きにたいする批判的検討を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで言語的および地理的制約のため近現代部落史研究で解明が進んでこなかった課題について成果を出したことで、新たな研究課題として関心を集めている。また移民研究や占領期研究、日本国憲法制定史研究にたいしては、注目されてこなかった問題に一石を投じた。

さらに、本研究は日米の国際共同研究へと発展し、日系移民のなかのマイノリティの比較研究、強制収容史研究を深める視点を提供した。ともに、今後の展開が期待される。

また、情報化という状況にかかわる批判的考察は、そもそも全国部落史研究会のプロジェクトに関わったの学術と社会との接点をめぐる論点整理であり、一連の議論は図書館関係からも参照されている。

研究成果の概要（英文）： Our study is a joint study on Buraku-min immigrants among Japanese Americans. Buraku-min is a minority group who were from discriminated districts called Buraku. Through critical reading historical materials and researches written in Japanese or in English, those which had been made in both Japan and United States, and also having several survey trips, firstly, we confirmed the Buraku-min immigrants. And second, we clarified that such discrimination among Japanese Americans was grasped in the WWII Incarceration, that the U.S. Army and governmental researchers mentioned the cases in their reports. Third, we proposed our hypothesis about the connection between the occupation policy of Japan and the management of internment camps from the perspective of bio-politics.

We also studied the issues surrounding information technology, revisionism and recent Dowa policy. Because those are related to the social environment engaged with how publish our works related to discrimination issues.

研究分野：思想史

キーワード：部落差別 日系人強制収容 日本国憲法 人種主義 移民 国際労働力移動 情報化 研究倫理

1. 研究開始当初の背景

本研究「被差別部落からのアメリカ移民に関するトランスナショナルな歴史経験についての研究」(基盤 C、課題番号 18K00115)は、これまで、ほぼ手つかずのままに置かれてきた本課題について初めて本格的に取り組むことをめざした共同研究であった。

戦後日本の部落史研究、あるいは隣接する社会学などさまざまな方法論をふくめた意味での部落問題研究において、本課題が等閑視されてきたわけではない。しかし、主として史料の制約、つまり英語史料へのアクセスにおける言語の壁、また渡航調査を実施するための研究資金、渡航先での調査の手がかりなどの事情から、積み残された課題となってきた。また、地域社会の問題として被差別部落の歴史を明らかにするという社会的要請から進められた自治体史に準じた部落史編纂事業や、差別の実態だけでなく反差別の闘いの歴史をも同時に掘り起こすという問題意識から取り組まれた部落解放運動史研究が優先されるなかで、かろうじて北海道移民事業や満洲移民事業について象徴的な数件の事例が明らかにされてはいたものの、ハワイ・アメリカ方面への移民送り出しについては、なかなか具体的な解明が進まなかった。

他方で、いわゆる日系移民研究においては、部落出身者の存在は埋もれて不可視化されてきたといってもよい状況にあった。これは、移民した部落出身者やその子孫が沈黙してきたことに原因するだろう。日系アメリカ人コミュニティが総体として、第二次世界大戦中の強制収容のために長く主流アメリカ社会への文化的同化と沈黙を強いられてきたこと、公民権運動に刺激を受けた三世世代が中心となったリドレス運動(1988年、レーガン大統領が公式謝罪し、補償法に署名した)を経て戦時強制収容の受難の記憶の語りがマスター・ナラティブになったことが、逆説的に日系人コミュニティ内部の重層性について語る抑圧としてもはたらいたといった要因が考えられる。このため、とくに日本側からの日系移民研究においては、視野に収められにくかっただけでなく、かりにおぼろげに見えていても追究には慎重にならざるをえなかったのだろう。

アメリカ合衆国における部落問題研究の古典である G. DeVos, H. Wagatsuma (eds.) *Japan's Invisible Race* (1966)では、その1章を割いて、日系アメリカ人間の部落差別の事例を報告している。また当事者研究としての、つまりエスニック・スタディズの一領域としての日系アメリカ人研究では、沖縄(ウチナンチュ)文化のリバイバルと連動して、ハワイ大学のプロジェクト報告書『*Uchinanchu*』が編まれ、日系移民の間での沖縄県人への差別に光があてられた。そのなかで、沖縄県人と部落出身者とがともに差別されながら互いに競合させられる関係にあったことが指摘され、またロサンゼルスに設立された全米日系人博物館の学芸員からも日系移民のなかに潜んでいた部落差別に言及するエッセイが発表されている。課題として意識されながら具体的な解明が進まなかったという事情は、日本の研究状況とも似かよっていたといえるだろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第1に、部落出身移民をめぐる事実関係をできるだけとどき、明らかにすることであった。すなわち、いつ、どこの誰が、どのような事情で、いかにして渡航し、また移民先においてどのような経験をしたのか、そこに部落差別が関わることがあったとしたら、それはどのような契機で、あるいはいかなる力学の下で可視化されたのかといった論点が、そこで浮上する。海外において水平運動の狼煙があがったのか、あるいは渡航先の労働運動や人権運動に部落出身者が関与した例が確認できるのかといったような関心も、これに付随する。第2に、そうした実証研究の成果を、移民研究ないしは日系アメリカ人研究に接続させることである。つまり、日系移民という集団内部の多様性に着目する研究潮流、具体的には前述の沖縄・奄美群島出身移民についての研究を嚆矢として、近年ではセクシュアル・マイノリティ研究が注目されるような議論の中で部落差別についても比較検討を可能にするということである。そして第3に、そうした部落出身移民の歴史経験が、どのような意味を持ったのかを、トランスナショナルつまり国境を往還する移民の経験それ自体がメディア化する身体であるという観点から、ひとつの、あるいは複数の文化交流史として位置づけることであった。そのことによって、たとえば、戦後の日本憲法制定にあたって、法の下での平等を定めた第14条の中の文言「社会的身分または門地」につながると考えられる GHQ 草案中の「social status, caste」という認識がどこからもたらされたのかという議論にかかわる手がかりを得ようとするものであった。

また、こと部落差別にかかわる課題であるため、研究成果の発表のありかたを念頭に、その環境をめぐる基礎的研究として、「情報化と部落史研究」についての検討をすすめた。

3. 研究の方法

本研究は、友常勉(東京外国語大学)、関口寛(研究開始時点では四国大学、2022年から同志社大学)および研究代表者の廣岡浄進(大阪市立大学、ただし大阪府立大学との大学統合のため2022年から大阪公立大学)の3名による共同研究であった。

先行研究で言及されている部落および渡航先についての調査をはじめ、部落解放運動や隣保館関係者、あるいは多くの研究者の協力もおおぎつつ、送り出し地と目される地域への現地調査とアメリカ西海岸カリフォルニア州への渡航調査をおこなった。その過程でアメリカ側の研究者やコミュニティ活動家との交流も重ね、アメリカ側の文献資料についての重要な助言も得る

ことができた。とりわけ、アメリカ側でオンライン公開されている、オープンアクセスのデータベースに収録されている史料についての情報を得たこと、また日系アメリカ人のコミュニティを基盤とするオーラルヒストリーの聞きとり事業や強制収容関係の写真などを整理してデータベース公開しているウェブサイトが有用であった。同時に、部落史研究の蓄積を整理しつつ、アメリカ側の日系移民研究と突きあわせることで、実証課題や研究にかかわる論点の明確化をはかった。この推進については、最も英語に堪能である友常の貢献が大きかった。

また、普遍的な移民研究の地平で論じるという意味では、国際労働力移動としての比較研究という視点も要請された。

さらに、情報化をめぐるのは、被差別部落の地名や人名をどのような基準で、どのような形で記述するのかという論点がある。たまさか廣岡が全国部落史研究会の提言プロジェクトに関わった関係で、基本的な考え方についての整理を進めた。

当初の計画では2018年度からの3か年計画であったが、2020年からのCOVID-19パンデミックのため渡航調査が滞り、延長を経て2022年度まで継続した。その間、廣岡が本研究を基課題として国際共同研究加速基金の国際共同研究強化(A)に採択され、2021年10月から2022年9月までの1年弱、サンフランシスコ州立大学を拠点に現地で調査研究に従事した。また、友常も在外研究として同大学で2021年9月から2022年3月まで共同研究にあたった。

4. 研究成果

本研究の成果発表は、研究倫理とも関わる論点整理のための基礎研究として位置づけていた、情報化状況における部落問題関係の史料や絵図等の図像資料、また研究成果の公開の形式についての廣岡の論考が先行した。公開の原則を確認しつつ、配慮を要する場合があることに注意を促し、関係者間の議論をよびかけた。それと関連して、歴史修正主義やそれと親和的な動向がみられる現状について批判的に検討を加えてもいる。

送り出し側の被差別部落の関係者から協力を得られたことで、関口は、1912年に内務省社会局が開催した細民部落改善協議会で報告されているアメリカ移民事業の詳細をたどり、あわせてスタンフォード大学フーバー研究所所蔵の邦字新聞デジタルコレクションを利用して、西海岸の日本語新聞が部落問題を取りあげた論説や部落出身者の投書を掲載していたことを示した。また当該論文が収録された論集の英語版では、先行研究批判を加筆することで日米両国の研究史への位置づけをめざした。

邦字新聞デジタルコレクションにはハワイで発行されていた日本語新聞も収録されている。廣岡は、このデータベースによって、山口県出身の部落民だと自ら明らかにしてハワイ日系移民の部落差別を告発したパンフレット『悪因習を滅絶せよ』の関連報道や、痛ましい心中事件などを紹介した。さらに、カリフォルニア大学図書館のOnline Archive of Californiaに収録されている日系人強制収容関係の調査記録や研究レポートなどから、戦時強制収容キャンプの中で部落差別が続発していたことがうかがわれ、カリフォルニア大学やスタンフォード大学などの西海岸の名門大学の研究者が投入された社会調査でも注目的であったことを明らかにした。当時の日系人の部落差別についてはGHQスタッフであったハーバート・パッシンの自伝にも記されているが、これらの調査記録で caste や social class といった表現が採用されていることは、日本国憲法 GHQ 草案と問題認識を共有しているようでもあり、今後さらなる検証を必要とするところである。

本研究では友常と広岡の合同渡航調査についてはその成果の一端を活性化しているが、アメリカ側の日系研究者との議論を経て、戦時下の日系人強制収容政策とそこでおこなわれた被収容者にたいする社会調査の解明に向かった。日系人強制収容キャンプの運営や調査こそが、戦後の日本占領政策の準備であったという作業仮説である。

サンフランシスコ州立大学エスニックスタディズ学部エジソン・ウノ記念日系およびウチナンチュ研究所と大阪市立大学人権問題研究センター、および科研費研究「社会運動における生存権・生存思想の影響とその射程に関する基礎的研究」(基盤 B、友常勉研究代表、課題番号21H03702)との共催で、2022年3月3日から5日にかけて国際シンポジウムを開催した。このシンポジウムで友常報告は、生政治の視座から、第二次世界大戦中のアメリカ合衆国の日系人強制収容がナチスドイツの強制収容政策と連続性を有していると指摘した上で、米軍史料で部落出身だと名指しされている日系人弁護士の経験を通じて、WRA(戦時転住局 日系人キャンプの運営にあたるために設置された)や軍が日系人団体 JACL(日系アメリカ人市民連盟)をどのように利用したのかが明らかにされねばならないと問題提起した。

総じて、前述の研究目的のうち、個別具体的な移民事例研究については、さらなる成果発表をめざして分析検討を続けているところであり、また戦時下アメリカの日系人強制収容にかかわってささやかな問題提起を提出したところであるが、議論を深めていきたい。

なお目下、以上のほかに共同研究の成果発表を準備しているところであるが、本報告書作成時点で完成しておらず、残念ながら一覧に加えることができなかった。また、このほか、いくつかの学術集会での口頭報告や一般市民対象の講演会もあるが、説明は割愛する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 廣岡浄進	4. 巻 813
2. 論文標題 部落の地名・人名をどう扱うべきか：大学教育と歴史研究をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 部落解放	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 廣岡浄進	4. 巻 214
2. 論文標題 都市の再開発と同和地区のジェントリフィケーション政策——新自由主義と部落差別解消推進法情况	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 部落解放研究	6. 最初と最後の頁 39-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 鈴木英生、花井十伍、廣岡浄進、割石忠典	4. 巻 5
2. 論文標題 情報化社会と部落史研究の課題——人名、地名、絵図などの公開にふれて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 部落史研究	6. 最初と最後の頁 2 - 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 友常勉	4. 巻 797
2. 論文標題 部落出身者のハワイ・北米移民	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 部落解放	6. 最初と最後の頁 21 - 31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣岡浄進	4. 巻 98
2. 論文標題 絵図のオープンアクセス化と部落史研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 GLOBE (公益財団法人世界人権問題研究センター)	6. 最初と最後の頁 10 - 11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 関口寛	4. 巻 -
2. 論文標題 アメリカに渡った被差別部落民 太平洋を巡る「人種化」と「つながり」の歴史経験	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 田辺明生、竹沢泰子、成田龍一 (共編) 『環太平洋地域の移動と人種 統治から管理へ、遭遇から連帯へ』京都大学学術出版会	6. 最初と最後の頁 103 - 146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣岡浄進	4. 巻 759
2. 論文標題 研究機関等による絵図・古地図のウェブ公開 (特集 情報化社会と部落史研究)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 部落解放	6. 最初と最後の頁 12-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小野田 一幸, 廣岡 浄進, 吉村 智博	4. 巻 770
2. 論文標題 座談会 絵図(古地図)所蔵機関における保存・展示・研究 (特集 絵図(古地図)をめぐる資料所蔵機関の課題)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 部落解放	6. 最初と最後の頁 32-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroshi Sekiguchi	4. 巻 -
2. 論文標題 Burakumin Emigrants to America: Historical Experience of "Racialization" and Solidarity across the Pacific	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Yasuko Takezawa, Akio Tanabe eds., Race and Migration in the Transpacific, Routledge	6. 最初と最後の頁 55-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4324/9781003266396	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 廣岡浄進	4. 巻 1 近代の部落問題
2. 論文標題 越境する人の移動と被差別部落	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 朝治武、黒川みどり、内田龍史編『講座 近現代日本の部落問題』部落解放・人権研究所	6. 最初と最後の頁 301-342
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣岡浄進	4. 巻 -
2. 論文標題 古地図と地名について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 朝治武、谷元昭信、寺木伸明、友永健三編『続 部落解放論の最前線』解放出版社	6. 最初と最後の頁 434-450
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件(うち招待講演 5件/うち国際学会 8件)

1. 発表者名 廣岡浄進
2. 発表標題 「同和問題」を否認する生政治: 部落差別解消推進法をめぐる批判的検討
3. 学会等名 273回日本専門家招待セミナー, ソウル大学日本研究所(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 廣岡 浄進
2. 発表標題 被差別部落からのアメリカ移民と戦時強制収容
3. 学会等名 第171回 サロンde人権, 大阪公立大学人権問題研究センター (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tsutomu Tomotsune
2. 発表標題 Engineered Community: Japanese American Internment Camps and The Buraku Immigrants ”
3. 学会等名 Throwing Lifelines across Borderlines: A Community Symposium on Critical Nikkei Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kiyonobu Hirooka
2. 発表標題 Discrimination against Japanese/Nikkei Immigrants from Buraku Community in United States and Hawaii:Focusing WWII incarceration
3. 学会等名 Throwing Lifelines across Borderlines: A Community Symposium on Critical Nikkei Studies (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 友常 勉
2. 発表標題 部落出身者の北米移民
3. 学会等名 日本社会の地域差別, 日本社会におけるサバルタン研究: 東アジアの疎通と相生 (韓国外国語大学校、オンライン開催) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 関口寛
2. 発表標題 在米日本人社会と被差別部落民 The Japanese Community in America and Burakumin
3. 学会等名 日本移民学会主催「国際ワークショップ 移民研究の国際化に向けて」(第1回) The First International Workshop: International Dialogue on Migration Studies (オンライン開催) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 廣岡浄進
2. 発表標題 プロジェクト「情報化と部落史研究(仮)」提言試案の作成に関わって
3. 学会等名 第25回全国部落史研究大会シンポジウム「情報化社会と部落史研究の課題 人名、地名、絵図などの公開に触れて」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 友常勉
2. 発表標題 移民、帝国、人種主義 Uchinanchu[1984]後のオーラル・ヒストリー・プロジェクトに向けて
3. 学会等名 「沖縄学」は可能なのか ポスト伊波普猷時代の挑戦と展望 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金間愛(キム・ウネ)
2. 発表標題 「人類館」の上演活動が問いかける日本「復帰」後の「沖縄」
3. 学会等名 「沖縄学」は可能なのか ポスト伊波普猷時代の挑戦と展望 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 廣岡浄進
2. 発表標題 絵図・古地図のウェブ公開と部落問題
3. 学会等名 第140回 サロンde人権, 大阪市立大学人権問題研究センター (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kiyonobu HIROOKA (廣岡浄進)
2. 発表標題 Embedded Buraku Discrimination
3. 学会等名 Workshop on Minority Rights (Chang Fo-chuan Center for the Study of Human Rights in Soochow University, Human Rights Program at Soochow University) 東呉大學張佛泉人權中心 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 友常 勉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 航思社	5. 総ページ数 400
3. 書名 夢と爆弾 サバルタンの表現と闘争	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	友常 勉 (Tomotsune Tsutomu) (20513261)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授 (12603)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	関口 寛 (Sekiguchi Hiroshi) (20323909)	同志社大学・人文科学研究所・准教授 (34310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 オリンピック開催地で何が起こっているのか 平昌2018 パリ2024	開催年 2018年～2018年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	San Francisco State University		